

亀井勝一郎

日の丸と君が代

日の丸と君が代

最近、機会あるごとに、日の丸と君が代と、それからもうひとつ紀元節のことが問題になります。今日は春分の日ですが、祭日を機会に、この問題を考えてみたいと思います。

日の丸つまり国旗、君が代——国歌・紀元節——建国の日と、これはどんな国でも独立国であるかぎり必要であり、とくに外国を旅行した人々の話によると、外国人が、自分の国の国旗や国歌に対する尊敬の念は非常なものだと私は聞いています。国旗を侮辱されることは、国

を侮辱されることと同じような重大問題であり、それが直ちに政治問題に発展することもあります。国際的にみればそれほど慎重にとり扱われなければならない問題です。

ところが日本の国内をみると、敗戦後、日の丸や君が代への愛着といったものが著しくへりました。むろん原因は敗戦であり、とくに戦前戦時中を通して、日の丸は侵略とか戦争につよくむすびつき、君が代は、旧憲法の天皇神聖化にむすびつき、どちらも軍人や政府のきびしい看視の眼や、強制のもとにあった、そういう暗い思い

出があるため、どちらも否定する人がいます。

しかし、この問題は単に国旗と国歌というそれだけの問題ではなく、実は国家の発展とか変革とか、全体として何か歴史的な大変革の起ったことと関係があります。たとえば独立したとか、革命が起ったとか、政治上の大改革が行なわれたとか、そういう思い出とともにあるわけで、日本も敗戦によって新しい憲法が出たのだから、この際、すべてを新しくせよという意見の出るのも当然です。

そのことと、もうひとつ見のがしえないのは、国旗も

国歌も長く用いられていると、それが習慣となり、伝統となつて、急にこれを変える必要もあるまいといった気持ちも人間はもっているものです。様々の国際競技でも、事実上君が代が演奏され、日の丸がかかげられるのですから、このままでもいいのではないか、もし変更するにしても、それは将来のこととして、しかも国民の全体が心から納得する状態のもとでなら変更していいのではないか、そういう人もあります。つまりこのことで、激しい政治的な対立など生ずるのは好ましくないとといった気分のあることです。

紀元節のことは今日申しませんが、二月十一日を紀元節とするかどうかで、国会が二つに別れ、たとえば三百五十票対百票といった差で、決定されたら変なものだと思いません。

国民の三分の一がそっぽをむく祭日など意味はないわけです。私は国旗も国歌も同じような性格をもっていると思います。国民のすべてが、心から喜んで旗をかかけたり、歌ったりする状態のないかぎり、無理しないのが第一で、つまり自然の感情を重んずるとというのが私の態度です。

たとえば法律できめても、いいかげんな状態なら同じことです。今年の一月一日、二月九日と、ある二つの新聞社が世論調査をしたところ、日の丸の支持（現在のまま）は九十四％、法制化した方がいいという人が七十二％で圧倒的に多いのです。ただ興味ぶかいのは、いまのままですと答えている人が九十四％であるのに、祭日にその旗を出すという人がわずか三十四％です。出したり出さなかったりが二十六％、出さない人が十五％といった率が出ています。

つまりそれほど乗気ではないが、いまの日の丸でいい

だろろうと思っっている人が多いことを示しています。国旗に對して、外国人のような真剣さが無いということですよ。おそらく真の独立心と誇りの喪失のあらわれではないでしょう。

もうひとつここで問題になるのは世代の差です、戦後に育った若い人々はどうか。これも今の世論調査をみると、日の丸も君が代も否定する人は少ないのですが、たとえば君が代の歌詞を理解しない人が半数あるということです。この原歌は古今集からとったもので、決してむずかしくないし、あのメロデーも莊重なのですが、内容は

若い人には親しみにくい。メロデーも若い人むきではないという点がたしかにあります。

「君が代」の「君」は天皇をさしているわけですが、もっとひろく解して、国の象徴であるとともに、同胞同志と解していいと思っておりますが、この点は「わが君は千代に八千代にさざれ石のいわほとなりて苔のむすまで」という古今集の歌はいい歌です。「わが君」となると、範囲を思いきってひろく、かつ親近感がわくと思えます。しかしどういいう歌がいいか。ここには個々人の好みが入ってくるのでいろいろ厄介です。

ただ私の申したいことは、さきのように多数決でうむを言わず決める性質のものではないということ。自分が君が代や国旗を愛するからといってそれを他人に強制してはならないということ。この点は愛国心もそうで、私は愛国心は大切だと思いますが、自分のそれを強調誇張してはならないということでもあります。

しかし根本は、日本の「新しい国づくり」と、それを通して形成される「民族の真の独立」という点にあります。日本人自身の手でつくりあげる「理想の国」というイメージがはっきりしないかぎり、国旗と国歌をどちらら

にするかを論じてもムダだと思えます。そしてこの民族の独立への努力と、その喜びの中で、ゆっくり考えること、それまでは現状のままでもいいのではないかと私は思っています。ここで人工的に、無理なかたちをとるのはやめた方がいいと思えます。同時にオリンピックではどうするかと心配している人がいます。なんでもオリンピックづくりにひっかけるのを私は好みませんが、今までの国際競技の通り、日の丸をかかげ、君が代を演奏すればいいわけで、神経質に考える必要はすこしもないと思えます。

私の心配なのは、オリンピックづくで日の丸が掲げられ、

君が代が歌われつつ、スタンド一杯が紙屑の山になりはしないかということ。公衆道徳、公德心の低下の方がずっと問題です。春分の日に旗をたてて、ピクニックへ出かけて、自然を平気で汚したり破壊したのでは、なんの意味もないと思います。

日本文学電子図書館

日の丸と君が代

著 者：亀井勝一郎

制作者：宮澤一郎

底 本：「日本人の美と信仰」
大和書房

1968年6月10日 初版発行

日本文学電子図書館